蕪村句集前編 上

中村俊定文庫
文庫 18
607
1

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
十万八千[illegible]
[illegible]

陵宝藏

[illegible]め法華経を[illegible]
[illegible]むとしたまふの[illegible]
[illegible]高[illegible]
[illegible]一[illegible]ふ説高[illegible]
[illegible]童[illegible]
[illegible]つ人[illegible]

一集撰書律佳業に
[illegible]を[illegible]
小禅忌辰の[illegible]
[illegible]と亡[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]の序を書むに序文
わ[illegible]を先世紀五十余年
[illegible]
[illegible]

京都帝国大学図書

蕪公羽白集巻之上

几董著

春々部

[illegible]
日の光と[illegible]の解乃のらす宗
三椀の雑煮ゆゑ長者ゆ
離居
くらしのあちとするやふちち
蛍乃声[illegible]日も暮[illegible]
うちひもの[illegible]初音

中村俊定文庫

○雪を崖にとゝ[illegible]も春

画賛

[illegible]や洗ふ[illegible]斬り梅

雪の日梅をしろに[illegible]青柳

[illegible]や家内梅を飯[illegible]

雪や茨ぐ[illegible]て高[illegible]

[illegible]り帰りたきに[illegible]

禁城春色暁蒼[illegible]

青柳や[illegible]大男乃仲[illegible]

[illegible]を[illegible]る梅[illegible]

梅[illegible]てさ[illegible]

捨[illegible]て柳[illegible]

[illegible]や芹生の里の[illegible]の中

[illegible]れ[illegible]梅[illegible]

草庵

[illegible]梅[illegible]を[illegible]

[illegible]て鶯[illegible]

白梅や墨[illegible]鳴鶯[illegible]

きら梅の枝は泥むらの柴垣又外
無くの場もかたう梅うもと
ゆかとしてゆをなめくめた箱
箱の梅あれたれたなりてくる柴
掛を木て庫裏をはこふう
ちくをとふ政の嚴刑なる
をいきめめふ罪をせ代
乃長くあって
隈くなるさきやくえれた

しら梅のあやふ枝をかたちをしたる
ちなやや螺鈿をなる卓の上
梅咲て世界をふ家のおもうを
原ルをいつくして梅のあるふ
枝を折て人あるをかや 梅うう箱
あるをつの仮をしやを
今儀る言なるをんはやを
梅咲をれるをやらうしやら
きら梅の枝をもる月あ

小夜衣小袖の梅の匂ひかな
梅を色　南すなほく小すなほく

早春

ふにさやかに京をさるる花の行
時雨の痕ぬくやぬくの氷まで
ふるの夢や小豆の煮るうち
春雨や白ふるうの赤ふの
やめうや宇賀をいとれ草
鶯や拝殿のうしろ鶯の

中山寺乃男うか

人日

七草や袴の函乃片むすび
ふれさうな径をうう行の中
古寺やかうかう拝るさうれ中
九輩とはなれたる
あうしゝ

節季うみをん寄の春
時白や僧乃うあや雪の岳

春の夜や京金堂の朱周り　李

春夜聞琴

瀟湘の月の夜のなくやおもかげ
ゆかしく鳥帽子をかたむけ給の箱
公達の折化うの音の長
きうしの侍者八千金の
音をとゝみ我宿の方へ
むらさきの曙を賞す

春の夜や高野の奥の院中て
女倶して内裏おさんかたの月
葉隠むすめやはを折ふる
ちやうを扇にかくす家や梶月
さゝやきを生てゆく秋や朧月

野宿

草庵水の声あさ日かな
指南車を胡地へ引去る霞かな
立春舟乃ゆくてゆく霞かな

橋ふるて日もすんとする春乃水
雲水の四条五條乃橋の下
足ふいの口うて潜るるれ
春乃水背戸乃田作ふとふ
雲の水うたく移縄の移たり
蛇を越ふ鶯のなりひや雲の水
西の京さたけの柳て
久しくあれ果る家
五月雨ふいをさふて

雲雨や人住て郷里を偲る
雨の軒の袋ぬらし花雲乃あめ
春雨や為はる弾弟子乃
五月雨や小蔵の小貝ぬるとかと
蛙ふ鳴て雲を峰声也雲の雨
ぬるふい生ふ池の水をや春乃雨

等伯

雲雨や月の書めあれあるる
雲雨や暮あんとて乃暮

○雨やものうちやく義と傘
某侍の法もやらて雨の面
雨やいさよふ月の影
さるさとやゆゑ小てゝとて
ある頃生乃ゝて
古屋ゝ茶釜光さゝ樣の
あらすや椿咲ゝむにたゝすみ
玉人(スリ)北ゝ行ゝ知らぬ法ゝ

細年やそのゝ京くゝ乃袖たゝみ
たゝむや名月四場の鏡の影
初はやあ行ゝ日のある
蔭とゝ乃もゝそゝ落のゝ
ある人ゝもゝゝ
命婦よゝ乃餅たゝ乃彼岸
うゝくゝに京ゝ乃田乃責
ゝ乃ゝゝ津ゝ乃里や田螺あゝ
靜ゝゝ坊ゝ乃たゝ乃ゝ

雁なきて驚破田にしの声を聞く
丁行て門田もなくおもはるる
海見ては田かとの月乃見るあて
さはやかに云こゝろ花屋のあき長者

郊外

海見ては名もしらぬ虫の白き花
うすくらの蔓ゝ土をめぐるく

芭蕉庵會

畑ふやふやもなくあるめ
ゝをあちの至所の蓮ゝ咲
細ゝあるみちを掃ける庵
小家ゝて
去西乃中ゝ初ゝ花ゝ
日ゝ乃花ゝ雄ゝ花ゝ春の山ゝ
果刈ゝ然ゝ蕎ゝ雄の
亀山ゝ面ゝ大工やゝ
瓦山ゝ畑ゝ
ゝ起ゝ雄ゝ

五月の雨つゝ良類ひ住む寺侍ふ

琴心挑美人

妹が垣根さみだれ草乃花咲めり

ゆかしや比丘尼寺

紅梅の薫花繽紛馬の糞

垣根くもりなる接木ふ

裏門乃ちに逢着をあるを

畑もちや法三章乃札のもと

さゝ蟹や草の実乃八平氏

さゝ蟹や攻をきりの彈舍

西山定日

みなと乃尾をぬる春の入日哉

定き日や雑巾のうみぬる柳の上

憚の旧

定き日の法りて考ふ所

裏の所柳日のすゝ〳〵ふ

畠つゝや名をく帰めひらけ

鮒や五石乃栗のあるゝ臭

むらすゝけこそうや 秋雁
大内殿うち出 薫香ゆく 慈の雲
大和殿の宮もいつ成もたそかれ
陸奥ちやゝ 水田の風 ゆれ息
蕪村 炬燵をつゝみ家路
無為庵句會
曙のむらさき乃幕や 春の風
みちをしの花 師の旅や 春のうゝ
片所うさ 春乃風

のうらうらとうらの浦の世の世 春乃
日のあたりやたゝ 春乃 巫女の袖

九董の蛙合催しうた

自うつて蛙なるる田面の方
国うたをきき蛙をさゝ 春乃
苗代の亀 蔵ふかい 春乃
日八日九をそい 春乃 蛙
連のうてすゝ 春乃 春乃の蛙
猶鉢鐘首 水午 論のうつ 春

〇作者つまびらかなる朝顔の
曉の面やきくの乃露いろ
よりもなほ青ざめたるや秋淺
古河の花信たゆる種なしし
志のゝめくれの雨降ものを焼物の
かゝる長帶かいさゝぬぎ
もゝとゝ東左曽紀の乃たゝめて
乃ゝ花ゝんゝ引ひあはせる乃ゝて
錦の小袋をさゝもちゝ

風なるもあるひは作者
黄色ゝたゝ結れを
山吹や井ゝもゝ流るゝ鉋屑
屑なる舟を上れいもみれゝ
貴殿よゝくゝさゝ崖の方
ゝゝ野ゝ御ゝん在ゝ
野ゝもゝ焼る地蔵ゝ
作ゝ野ゝ所ゝ黄昏
作ゝ嵯ゝ石移ゝ

近ふくもてくれしみち〻躑躅の
咲し時て行山里乃仮白し
岩〻腰我ゆ乃花乃咲し身

上元

古雛やもとの人丸袖ル他
笑をもる息口ゆれや雛ニ對
たゝもの咲ものあるや雛の梟
世代や長さ〻と石菖花
雛見世乃行をゆくゝろや長の雨

雛ゆる都きつれや桃乃月
咲ゆて寄て牛つなゝたや桃も
南人を吼る犬あるも〻花
さゝらゆ東桃て手〻さ小家ゆ
赤伊元つさむ乃振ゆ着
几帳ゆ中ゆ竜のあゝとゝろ
やぬゝめゆてゝあれゆの糸

風入馬蹄軽

木の下ゝ蹄乃をゝ散さゝ

年のくれの雪ハうすの花の
剛力ハ徒くに見るあ山さくら

曉臺の伐れ道家よ和へる俤て
独抱林の花ハ道義の桜人
暮人とすまをしたのしさくら
錢賀して今やよりハ山ちかく

糸桜賛

世に暮て雨もる宿やいとさくら
奇屑の花ハ世れて山たく会

まもなくもおりともあれ山桜
況俄ひと日閑院桜乃さかり
みよ吹ちらしてし山桜
旅人の鼻ハ山さくら
雨ふりの日ハ咲ぬてしけれ

吉野山

花ちくを桜ちく迄ハ川
花ちく暮て我ふるさと吹乃ち
花ちるやおもふ春のうらかり

花の出盛りなるを見て歌を送り送られし人
所古人のさまざまなる歌共

高野を下る日

名残住て山を出る真田うの詠の
西川さそふ花や流れ去
なら坂や當麻寺ゆ乃花一本

日暮るるを花ゆゑ宿をかりける
峠哉へ陽る人いとの花の暮
花の香や清水のもも山清水

雨日花ゆゑあそ
発士の籠やあとの花衣
彼地ハ後の世とけて花見ゆ
ゆゑ無ていさみて白拍子
花さまてなもこはるいと乃母
なるくさ人のあや所く
やとの内を訪ひて
形を縮し草履も見て新藤
居風を伝ひ花のもとり分

雪乃たまゝ帰や花のゝ山
ゆかしたの春ハ御堂乃花ゝ哉

一片花乃減却春

さゝ〻ぬ指義乃行や減却春
花の幕無数を敷く　女あ東

やたらと行くのきうおろ
ちせのひてうぶさひ地て
ゝそこのひるゝ和
小冠者ゝて花乃名を答ゝ

みちもあるゝ夜も更ゝ春の暮
誰ゝのひゝき花ゝを保ゝれ
閑帳乃錦たゝうゝ毒のタ
ゝゝ霞のさゝれを毒の日ゝれたり
春のタたゝ東ゝる香を作く
花もて不宮乃寺ゝぬゝり
苗代や鶏乃鳴ちゝゝ家
甲斐なゝねゝやゝゝゝれ梨の花
梨の花月ゝ書ゝゝ　女あ東

人なみなみ日あるく培よ庵師の家
みもとに来踊音や春のたのし
庭先に春もあけて春の花

春景

菜の花や月は東に日は西に
なのはなや笠なる中に見る茶
菜の花や鯨もとらぬ海暮れ
春雨廣會
竹窓して南北の風吹くへ夕日

椿ちるや床ハ維方の祝詞
暮春
ゆく春や逡巡として老さみち
行春や撰者をうらむ哥乃主
行春の盥も洗てゆく春や
ちるものを乃春をあるいて住無うち
名残のお業おしむ
行春や白木花見や 垣乃ひま
春をしむ座主の聯句に名れ菜

行春のやむことなきを筑羽山
まさるまつの日てまの陰こそ
ゆく春の名残りへのかるいもの神
あるくつ白をもれて
西行法師 きゝなれの春
春惜む宿やあるを乃京猫

裏之部

紺色なめしかはゆしき更衣
はなやかなるにのきしたこうもう
大兵の九十あまりや与五
こうもう武蔵守右化二人

鳴戸

更衣御の今宵白し
たのもしき数のめしの給ひ
痩腰の色に微風あり与五

九月十の海なりを更衣
三れるたちのもよりの
みるさしめのつくりたるを
御みにてをりたれを
稿のふとう陽さあいせう形
更衣いやしくもうたる儀
鞠色る女ものやかとさを
かとさにて安堵を筋道て
子親 極を作るむや同与案

[illegible]てふつゝめるや 花の
[illegible]ゝ侍や都のそらたのめ

大濃るゝて

[illegible]ゝ[illegible]東四郎左衛
岩倉乃[illegible]女[illegible]ゝ 就
稲[illegible]乃[illegible]ふ[illegible]

[illegible]山を[illegible]る日
みやこのなゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
草の[illegible]の車 [illegible]てのち
[illegible]てゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ 片

[illegible]翻 [illegible]年 吐[illegible]蓮

閻王乃[illegible]や牡丹を吐んとも
寂として[illegible]の[illegible]乃[illegible]
地車乃[illegible]ゝ[illegible]牡丹
[illegible]
牡丹[illegible]
[illegible]乳の[illegible]

山蟻のあくらをほこ　白紙丹
廣庭の引こんや天乃一方々
集落乃主人社殿和殿の
二鼎をかして法花一鼎々
発るをもてあさまれたや井戸
王侯々交らむ乃ハ鶉衣袖袂
乃ち山伸々名利をいとる弘
和尚土の首々かけ々ん鞠鞠る
閑居なる天和尚書るとやいと

ハハハ人人こうんこうハ鳥なのうう
食次の底たく音やうんこう
生涯を宮あるもなんす閑居な
ん乃めを置の去やんこうう
ひたすらに姫の礼義やうんこと来
閑居なさんの根も砌て居る
ん乃ん乃のもなく不可もふくなる
　　津記　曾盛
名のなくあ去のうう乃ひとさを

[illegible]

[illegible]の音たの〳〵 杜若

[illegible]雅[illegible]と別る

みゝらの[illegible]や[illegible]里の松[illegible]更たる

船[illegible]れてよりてをり[illegible]の門

みゝらの[illegible]や[illegible]の上[illegible]高の色

[illegible]や同じ流れ川[illegible]水

[illegible]や松[illegible]浪[illegible]

[illegible]夜や[illegible]間[illegible]船の泡

みゝらの[illegible]や三[illegible]高や[illegible]井川

[illegible]

みゝらの[illegible]を眺らてす[illegible]公[illegible]

[illegible]や[illegible]ら[illegible]乃 捨[illegible]

みゝらの[illegible]や[illegible]白[illegible]

みゝらの[illegible]や小[illegible][illegible]る所[illegible]

京都の[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]や一つあるよりて志賀の私

みゝらの[illegible]や伏[illegible]の[illegible]淀の[illegible]

印のもの入るを蕗の屋とも
まてんれを多乃橋寒とものめ
奈仁佐上人の西行のもの
たるかのいとゝあしきさま
実さてやあのうたる竜の
志のめやもえてふくう葉の雨
砂川や或い葉を流れ
葉の葉をは君とを雀 歌
三井るや日ハ午みまる若 橋

あらたゝ屋をトたるに
物主ハ慎まらめ住ハ方
地尾を奈良とゝ奈ハ
窓の燈の稍ゝのる若葉ハ
不二ゝとゝ行て ワとゝふ
施頂の城たのしさ
若葉して水白くまた黄ゝう
山さ法ハそふ舟漕ゆくハ
地を截てワ原谷紙の

故郷の月にうるる袖てふ事や
尼寺の鐘ものうき霞月紙
あら深し袖吹かぜも花ぞなる
故郷を思ひ内に居る弟の袂ぬれぬ
ものとうら三年前の
水機に寄して
鶴やまを羽をたてやなを
古井戸や蛙とぶ魚の音信
ふ風に故郷ゆくみなと

故郷にて寄せる僧の坐有る
岩山寺にて
三彩寺大仏くらやうの
故の声も西の花の散るひつ
諸子比丘の僧なる今生て京
いにしへのあれに行つめれ
故郷にて翠微にうる京の内
若竹や地蔵の花ありやう
笋の義の楽内やをとと

○夕日の光りなどの
筍や 梢の法師うすきふん
ゝ 光を離れ 屋くもあらぬ
頃 紙て 墓の 蔭 ゝ ゝ
岩 苔の 雨 ゝ 雨を 待て
こゝ 風 ゝ 音 ゝ 雪 を 拾 ゝ
ゝ 藤や なる ゝ 材 乃 雪 ゝ
病人の かる ゝ 色 ゝ 雪 乃 秋
旅 雪 居 移 種 雪 ゝ ゝ 捨 ゝ て

佐東の ゝ ゝ 庵 て
目 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
雪 雪 京 ゝ て 種 雪
物 ゝ ゝ ゝ 乃 雪 雨
大 曽 九 菫 ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ 遠 ゝ
蓑 ゝ 種 雪 ゝ 中 乃 水 車
丹 ゝ ゝ 加 ゝ ゝ
方 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

なれ過た鮓をあるじの遠忌かな

鮓桶をこれへと樹下に床几かな

鮓つけて誰待としもなき身かな

鮒すしや彦根の城に雲かゝる

兎足ハ周の正當ハ女月中の四日
なるを卯月のはしめとして

遍照ハ宗に係れ中なきて

麦刈ぬ近道来ませ法の杖

かりそめに早百合生けたり谷の房

かの東皐にのほれは

花いばら故郷の路に似たるかな

路たえて香にせまり咲いばらかな

愁ひつゝ岡にのほれは花いばら

洛東芭蕉庵落成日

耳目肺腸こゝに玉巻芭蕉庵

青梅に眉あつめたる美人かな

青うめをうてばかつ散る青葉かな

かはほりやむかひの女房こちを見る

多賀やゝ小青嶋の脛をうたれ
たちまちふるふるしけや古鈴

宸筆の一字幸こ訪れて

粉解て草庵の音ゆゝし
文山やうつ迫ふれたる美狩人

述懐

推の光人もまきあるものゝ
少保く利鎌ゆらまい荒刈
志のゝめや森の迫江の森畠

探事を調し一言根の倫まゝ
屋の宅やゆ行ふれらみ月もも
路ゝるこの刈廉花さく方の丞
出のゝ宅に害ふれ落ッ桜の花

宸筆乃舊思あるゝて
法忍ゆ郷士を集めて
多山さ今遠しゝるゝ
ゝさ方を吟あつゝや花ゝ
さみれのゝふ柱や武ゝ

明へ富士をまもりさしたる雨
さみだれや大河を前に家二軒
さたれやゆく春の光を捨てゆく
小田原にて合羽宮この皐月雨
さみだれ乃大井掘たるとこさを
さしたる雨 田毎乃月こゝかの象

青飯殿に仰にしたがひて遊ばる
旧歳の宗こゝろ会て
小掘こゝあつさあやめ哉

ばこよりの碑こゝ見む 夏木立
涼ナ秋ゆもてりやなこてち
行や壬生笠ゆ(ナヘフル)農 なつ野路
行こてこゝに 行しゝ夏草
みちのくに五月雨草原を
たゝれて
葉ゝ花の松さうせと 花ちゝゆ
離るゝ花たる力を頼めて田郷小
能掘て掘る田植乃 男こゝ

物衣の袖のうら這ふ蠅

一書生此用意の事を

学問ハ座うゝ敷けるゝ所す

てゝ動やうに角ゝ字乃にしてこ出

旭日の住を宿やうせ臭

かゝ所てゝ雨うゝ降やゝ切せ

雪信う蠅ゝ振ふ 現この事

恵賀

かと葉多く冬此くゝ如ふ

閑の名に小雛のうら青なる柳葉

蝶乃鳥も合歓の無落乃

蠅いとふ為をたゝて居の事

春深舎事出の所にて

誰住て樓居るゝ物川乃

志のゝめ物をのゝ此たる魚

花なり物何ことしハ入てめ乃

居乃乃名色自分る物川乃

物舟漕くに窮まれて照射乃

百日墨もやきあさくうつふ
日をへて藤みる葉の夏出
蓮子高麗不二の夢
九月原つくやもと
陸奥て日枝を九十乃化粧ゑ
高南判髪三本掛て
脱ぬる指も丑みの小ゆの
石工の鑿ゆ一たる清水ゆ
茶釜ゆて音ふくなれる清水

也山吉水ゆちいさき泉を写し
たるに貧乏のそなれを
仕度縣命の花つ栄利を
もとめもとうい志やし庵を
源中つく曳とつる
鏡亀の青磯もちらめ山清水
二人して泥をを濁る清水
我宿ゆいふ月原さし水面
蓮いまれ人形原を孔の立

言うかやさの乃唐乃三十星
ふるかちや黄さ咲く原とあ乃ろう
ゆ白いの花嚙ム猫や咎ふさろ乃

律院を歌ひて

乃石ゆも二つ四つ生ひ出ぬ葉
蓮の香や水をふるて若三す
吟売乃落ちふる蓮乃
白蓮を切らんとおよ俤の
河骨の二もとさや雨ぬ中

ゆ乃のみとぬあ乃ら
やをらたちへまふる
ひとりたくて

羅ゝ遊る蓮乃こちら哉

夜日三句

雨乞ゝ星や国国乃ふみよ
貞殿の字敏も陰子早ゝ
大粒な雨い祈乃奇特うな
ぬ小ゝる里人のあやるぬ月

壹丈草ぶかき庭の月
めずらしく乃ぶ陰にうゑ置たる
所童の遊ぶる宿やみ乃月
風山水乃月ゆゑ傾き
雷ゝ小雨ハ降て風の音
あゝ荒ハ雨ゝゝ乃れて風たゝず
あるゝゝて
弓丸の芋の油さたゝもゝ
細腔ゝ夕風さむる　尊

第根ゝて
あゝ面の花ゆゑ
佛佛ゝ百体ひとゝ酒
夏病を船のあゝ面遊る杉園

寓居

半日乃閑を樓やせみ此多
大仏のあゝ宮殿をみ乃壱
婦行者乃ゝる年の胡
蝶帰やゆ仏正坊のゆゑ可

けふ香や何ぐとまるせみ衣
かけ香や唾の姫乃ひとなり
けふ香や口をれ白なる袖たみ

雁宮入しおとたれ去れ
ぬ
ぬとて扇の裏陰おつる
とくて笠うなたる雨乃
那国のとれも陸奥帰りお夏
ぬきひの国画えなのけ
後一時草乃あるる乃雨乃

七日

後雲や青空の風なる
さきとて今や俗の作る稲乃秋
か家乃西岸乃稲を作て
丈のにうるたり久をみ
洞乃の乃ぬすなのり咲る
をしさや都を吹うあれ川
昔国の魂をまく
河原や蓮うまるく作るも

川床に憎き法師の立居哉
涼しさや鐘をはなるゝかねの声

鴨河にあそぶ
川狩や楼上の人の見しり貌
雨後の月誰ソや夜ぶりの脛白き
月に対す君に唐網の水煙
川狩や帰去来といふ声す也

雙林寺独吟千句
花ちるや筆もかはかず一千言

白雨や門脇どのゝ人たのみ
夕立や草葉をつかむむら雀

施米 水粉
貌あをき僧も交り施米哉
水の粉のきのふに尽ぬ草の庵
水の粉やあるじかしこき後家の君

旅意
廿日路の背中に立や雲の峰
揚州の津も見えそめて雲の峰

而て飛鳥川を渡り
屯のみを四澤の水乃淵てよか
瀧壺とふや富士の麓なる
日陰の瓦山なるあたりに
居て居る舟て商てゐる暑さを
[illegible]宮商武者
望月の刀てゆる商うな
宗證て著わ弦て大仕を
著を拵て仕て[illegible]みて

紙屋て書を避る暑さを
花乃山て今て探題
慶居生いて和文を作る人
屯千代鄙の俳作て惠乃当
とて人乃逆て乃銀河三千尺
宮商
芝居やたのもて商ての下海
裸角て弦て作の中を夜弦
作て祢宜ておとも仕弦

負けなの中屋やなたらく
出水のかぎり穂波 夏稜
勝河入ちかなる
田仲とのる里て
ゆかしきて所見てよくみさせ川

蕪村句集上巻終